

みめじみの

第9部



みめじみの

第9部



大谷光道著

目次

元氣	2
自己紹介1	4
無宗教の人はいるのか?	7
まずは入口	12
自己紹介2	16
方法論	21
成果	24
読者の頁	30
感想／意見	30
あとがき	32

元 氣

今日は中小企業家同友会・

西神戸支部の皆様方にお話できるといふご縁を頂戴しまし

た。このお話のありました当初からどんなお話をすればいいかと、楽しみと不安が入り混ざりながら、今日になってしまいました。

例の大震災から、もう五年になるんですね。しかもこの西神戸はその中心になった場所なので、当時のことを思うと言葉が詰まってしまいます。

震災直後、お見舞いに来た時は、大阪まではいつもの通り電車で来られたん



ですが、天保山（大阪港）から船に乗って神戸の港に回るといふ、普段では考えられない経路をたどり、またそうでないと何時間かかるか判らないといふ状態でした。

変わり果てた街並みを歩いていて、道路わきで、ある有名なコーヒー・メーカーの人達が無料の振る舞いをされているのにでくわしました。私にも「どうぞ一杯」と勧めて下さったんですが、「震災も受けてない私が、いただくわけにはまいりません。」とお断りしました。しかし「まあそういうわずに」ということで、熱いコーヒーを頂戴してしまいました。寒い路上での紙コップのコーヒーの味は格別でした。

元 気

「こんな時にコーヒーの無料の振る舞いとは、これはまことにいいコマースィヤルになるな。」という思いがちらつと脳裏をかすめました。次の瞬間、「皆が自分のことを捨てて人のために働いている、こういう一大事に、こんなことを思うのはまことに申しわけない。自分自身に恥ずかしいな。」と感

じたことが、今思い起こされます。

あんなに大きな災害を受けられたにもかかわらず、これだけ短期間に立派に復興を成し遂げられて、これは一にかかって中小企業をお預かりになる皆様方の底力ではないか、と拝察しているところです。その皆様方の前で、このようなお話の機会を与えて下さったこと、まことに光栄に存じます。

今日は、私なりの宗教観から「元氣」についてお話したいと思いますので、最後までよろしくお付き合い願えればと存じます。

自己紹介などもするようにとのことです、お恥ずかしい話から始めます。

自己紹介 1

ただ今、昔私が会社勤めをしたことがあるとご紹介いただきました。

私の就職した頃は、「商社マン」というのはその後一般に言われるようになかったいいものではなく、「ネクタイを締めた丁稚^{でっち}」と言えばおわかりい

ただけるでしょうか、それまでにない経験を山ほどすることができました。一年余りで家の用事うちができて辞めることになったんですが、会社時代の経験が私の大きな心の財産になっていることに時々気付き、いつも感謝しています。

入社して最初の三ヶ月は新入社員研修でした。まずそろばん、それから英会話、そして貿易実務だったか英文タイプだったか、苦手なことばかりでどうなることかと思いました。

特にそろばんで思い出すのは、私の小さい頃、幼稚園ぐらいだったでしょうか、そろばんで遊んだことです。あの上に乗ってもものさしで漕こいでね（笑）。その時のものさしも呉服用の鯨尺くじらじやく尺やつていうのでした。今でもあるんでしょうか。最近は「お手伝いさん」といいますが、そのころは「女中」という言葉しかなく、女中部屋に鯨尺がありました。そろばんもそこにありました。その鯨尺で、廊下を漕いで歩いて遊んでおりました（笑）。

女中たちに、「そういうことをして
いると、あなたは大きくなってそろば
ん絶対上手になれないですよ。」と言
われ、「そんなことないわい。」と言っ
てやっておりましたら、案の定会社で
ひどい目に遭あいました（笑）。「こうい
うことが自業自得やな。」と後で思っ
ようになりました。「罰ばちが当たるよ」
ってしかられたんですが、罰ばちっていう
のは決して神仏かみほとけが当てられるものでは
なくて、原因は全部、昔自分が作っ
ているのだということが判ったのはだい
ぶん後のことでした。



英文タイプだけは、毎日ローマ字の電報を海外の支店に打つ仕事があったので、後になつても役に立つものとして残りました。タイプライターの上には乗らなかつたので……(笑)。

無宗教の人はいるのか？

さて、話を本題に戻しましょう。

私は「宗教を自分のものにするのが、そのまま私たちが元気になることである」と考えております。

なんでもいいから——と言ってしまつては少々荒っぽいでしょうか——是非ともご自身の宗教をお持ちいただきたい。

「宗教というのは難しいものである」とか、「あつてもなくてもいいものである」とか、あるいは「そういうことにはかかわらなくても自分の一生を過ごせる」、と考えておられる方がけっこうあります。

我が家にいる犬を観察していると、彼女は——メスです——自分も家族の一員で人間だと思っ**て**いる**よ**うな節もあります**が**（笑）、どうも先**の**見**通**し**と**いうことは彼らにはない**み**たいな、すぐ次の瞬間に起**こ**り**そ**うなことはともかく、一日先**二**日先**と**いうことは**ま**ず頭**に**ない**ん**じや**な**いか、**と**いう**気**が**し**ます。

このような人間以外の動物と違**つ**て、**私**たち人間は**将**来の**こ**とが**た**い**へ**ん**気**になる動物です。朝**起**きたら「今日は何と何をせん**ら**ん**か**な。」と**考**えます。「明日はど**こ**ど**こ**へ行かん**ら**ん**け**ど、だれと**会**つて、どんな話をして……。」など、いろいろなことを**考**えます。将来の**こ**とが**気**になるし、また知らず知らずのうちにでも自分の目標や計画を持つてしま**う**よ**う**にできてい**る**よ**う**です。また、歳を重ねるに**従**つて「やがては死**な**ん**ら**ん」、**そ**うい**う**問題も**気**になって**き**ます。人間は**そ**うい**う**動物であるので、「心の支え」とい**う**もの**が**どうしても**欲**しくな**つ**てくる**の**ではない**で**し**よ**うか。

そして、いつの間にかその人自身の支えを心の中に作ってしまっているはず。その内容は人によって違うし、勿論立派であるか、お粗末であるかも違います。「お粗末な支えからより立派な支えにしていく方法を教えるのが宗教（教え）である」と定義してみてもどうでしょうか。

よく「私は無宗教です。」とおっしゃる方があります。これは「無宗教という名の宗教である」と私は思います。無宗教であると突っ張っているだけのことであって、その人自身の「支え」は必ずあるはず。そして、その支えをその人なりの方法で、より立派なものへと磨き上げてきたはず。その立派なものにするための方法が、その人の「我流」だけのことなのです。仏教とかキリスト教というような、体系立った普通にいわれるい、わゆる宗教でないだけなのです。

そう考えて私は、「世の中には無宗教の人は一人もいない」と確信するに至りました。

おもしろいことに、「私は無宗教だ。」とおっしゃる方に限って、自分が経験し信じて来たことに拘こだわって会社の中などでそれを「是」として社員に勧め、ご自身が神や仏、または教祖になっているのにでくわすのは（笑）、この「我流」の帰結ではないでしょうか。

それと、海外で「あなたの宗教は何ですか。」と尋ねられたとき「別に：：ありません。」と答えて、相手の視線から恥ずかしい思いをした、という話はよく聞きますが、日本では「宗教は持っていない。」と言ったほうがインテリに見てもらえるということがあります。こういう方もそうは言いながら、自分自身が「我流教」の神か仏みたいになっていることが多いように感じます（笑）。

「我流教でそのまま行くんだ。」というのも一つの選択であり、勿論自由です。それどころか、今は我流教でもやがてはお釈迦様やキリストのような教主にならないとは言い切れないのですから、「何々教を始める。」とおっし

やるならそれも一つです。

それはさておき、一般的な既存の宗教について、私たちを元気にするメカニズムに話を移しましょう。

「お粗末な支えからより立派な支えにしていく」と言いましたが、心の支えがより立派になることによって、自信と勇気が湧き、充実と安心に裏づけられた元氣、本当の元氣が生まれてくるはずで

これについて要となる事柄が三つあります。

一、その教え（宗教）に入るための入口、動機。

二、目標（信仰や覚りなど）に達するための方法（教え）とその実践（修行や修養など）。

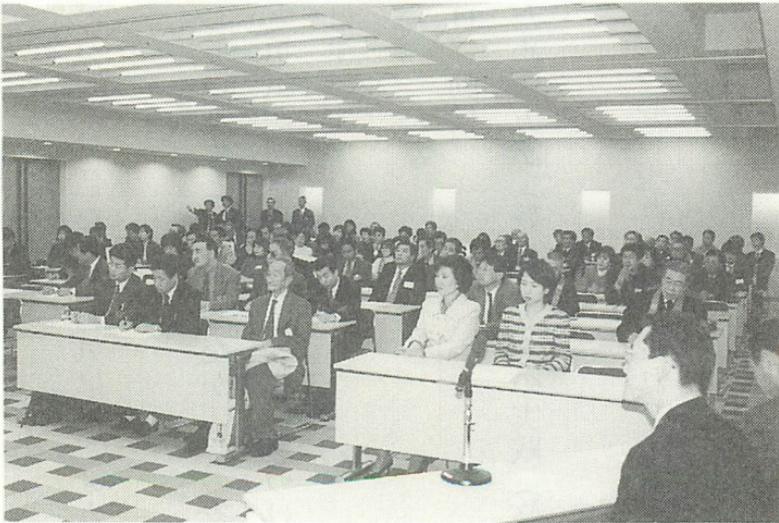
三、目標に到達したあとの成果（私たちの心に現れ、表に現れてくる変化）。

これを順次見て行きましょう。

まずは入口

子供の七五三であるとか結婚式であるとかというおめでたはお宮さん、お葬式とか暗いことはお寺、と我が国ではそういうのが通っているようで、いつも私は不公平であると思っております（笑）。

坊主を見ると「葬式」、とすぐに坊主と葬式がイコールで繋がってしまいます。私もこういう格好で病院へ見舞いに行くといやがられます（大笑）。
縁起が悪いって言われるんですね。で



も、私が見舞いに行った人は、後で全部ではないにしてもたいい病気がよくなっておられるんですよ。私が行ったからかどうかはわかりませんがね（笑）。

それから、この前なんか久しぶりに会った人が、「お仕事、ご繁盛ですか？ あつ、失礼しました……あ、そうそう、法話や講演なんかもお忙しいんでしょ？」と。どうも前半の意味は、「お葬式がしょっちゅうあるのか」ということを聞かれていたようです（笑）。

いつもこのようなご挨拶を受けるわけではありませんが、今日のこういうお集まりに呼んでいただくことでイメージ・チェンジができて、ありがとうございます（笑）。

身近な人の死というのは、何も仏教に限らなくて、信仰に入っていく一つの契機になる、その点は間違いないと思います。そして死ということだけじゃなくて、病気もそうです。お釈迦様は「生老病死」、つまり、生まれるこ

とと老いること、そして病気になること、死ぬこと、この四つの苦しみからの解放を目指して、地位も名誉も財産も家庭も捨てて修行の道に入られたことはご存じでしょう。

さんざん苦勞することを日常的にも「四苦八苦」といいます。四苦八苦とは、生老病死にあと四つの苦を加えて、人間のあらゆる苦しみを表します。愛する人と別れなければならぬ、好きな人あるいは物とやがては離れなければならぬ、別れなければならぬ苦。それから嫌な人と、憎んでいる人と、嫌やけども一緒にいんらんとする苦。それから欲しいと思つて求めるんだけれども求められない、自分のものにならない苦。それと、私たちが肉体と精神作用に執着するための苦しみ、生きていること、ものを見たりものを考えたり、そういう自分の存在そのものが、もう苦である。こういう四つの苦があります。そういう私たちの苦というものが宗教、ここでは仏教に入つて行く入口になる。



四門出遊



四門出遊（四門遊観）：釈迦が太子であったとき王城の四門から外出し、東門で老人に、南門で病人に、西門で死人に、北門で沙門（＝出家者）にそれぞれ出会い老病死の苦を見て、出家の決意をしたという伝説。

（『大辞林』より）

よく考えてみると、楽しいこと、楽をしているとき、あるいは自分の思うように何もかもが動いているときには、宗教というものを顧みようとはしない。それは当たり前のこと、自分自身が神や仏みたいな気持ちになっっているわけですから（笑）、近づこうということはまずしないのが普通でありましょう。

こういうのを有頂天といいますが、こんな時の方が苦しみや悩みのために沈んでいるとき以上に危険なので、本当はこういう時にこそ心を静かにして教えに近寄るべきですよ。

自己紹介2

多少脱線いたしますが、さっきご紹介いただいたように大学は理科系でした。小さい頃から理科系に行きたいという、ぼんやりしたものがありました。入試の願書を出すときに「何々学科」と、第一志望・第二志望の学科を

書くわけですね。その頃に何を考えたかというと、機械科というのは機械にはさまれるといややという、恐怖がありました（笑）。それから電気というのも感電したらかなわんと（笑）。ちょうど私のところは建築はありませんでしたが、建築というのは高いところへ上がらんならんし怖いな（笑）。それから、化学関係も爆発したら怖いですからね（笑）。

そういうようなことで、消去法で最後に残ったのが制御工学科で、今はシテム工学ってカタカナの名前に変わっていますが、そちらへ行くことにしたわけです。ところが四年生になって卒業研究の段階で、原子炉制御の教室に入ったんですね。まあせいぜい理論とか——大学卒業程度の研究でたいしたことができるわけないから——ちよつとそれのまねごとみたいなことやろうと思っていました。ある日研究室で、「近大（近畿大学）に実験用の原子炉があるから、今度見学に行こう。」という話先輩たちの間から出ましますね。怖くなって、「何とかその話がつぶれへんかな。」と思ってましたら、見

事にその話がつぶれてやれやれでした……(笑)。

こんなことばかり言っていると、私は怖がりでいつも逃げ回っていると思われそうです(笑)。「一面、こういう思いもあった」とご理解ください。そうでないと、指導教授にも叱られます(笑)。

この制御工学科に入学してしばらくしてからですが、ふと思ったことがあります。「科学とか文明とか言うけれども、私たちが人間というのは、楽をするために苦勞しているのではないか。つまりちよつとでも世の中、身の回りを便利にする、便利にするためには何か苦勞して物を作らないかん。どうもそのために苦勞しているみたいやな。」と感じたのを思い出します。中でも自動制御というのは人間が機械のコントロールをせずに、それをまた機械にさせるわけですから、全く楽をするというか、サボるための機械を作るような勉強をしたわけです(笑)。

別の教室にロボットの研究をしているところがありました。これからはロ

ボットの時代と言われていますが、ロボットと言えはおわかりのように、まさに人間の代わりに働かせるもの、つまり人間が楽をするために作られるもので、それも便利にしようとするばするほど作るのはいへんになります。

「同じように宗教というのも、自分が楽になるために修行などの苦しいことをやるのや。科学も宗教も両方とも、同じことかな。」と最近になって思うようになりました。何かの本に、「科学も宗教も矛盾はしない、両方とも人間が必要としているという点で共通し



ている。」と、よく似たことが書いてあったのが思い出されます。宗教と科学は矛盾・対立するものであるという見方をする人が多いのは残念です。

私の好きなたとえ話があります。『鳩の好きな王様』という小さなお話です（著者註…鳩の代りに鸚鵡おうむというのもあります）。

鶏の肉ではなく、鳩の肉を食べるのが好きな王様がおいでになったというお話です。家来たちが鳩を捕まえて来て籠かごの中に何匹も飼って、肥えておいしくなるようにと餌をたくさん与えます。餌をせっせと食べる鳩の中に一匹だけ食べようとしない鳩がいます。すると仲間が、「こんなおいしいものをもらってなのに、なんでおまえ食べへんのや。」と言うんだけど、その一匹だけは全く食べずに、つまり命懸けのダイエットをするんです。目の前においしいものを持ってこられても、我慢して我慢して食べずにいる。やがて体力も衰えがりがりに瘦やせたある日、格子の隙間からすつと抜け出て自由を得る、というお話なんです。

本当の自由を得るためにはそれだけの苦勞が必要である、ということがそこに言われていると思います。

方法論（『みめぐみの』第5部参照）

第二点は目標に達するための方法でしたね。

どういう方法で、覚りや信仰などの結果にたどり着こうとするのか。そのために教え、各宗教あるいは宗旨の教えがあります。それから、それを学んでいく、身に付けていくための修行、あるいは修養なんていうところもありますが、そういうものを積み重ねて行く。

これは仏教の場合、私どものところは浄土真宗ですが、ほかに浄土宗もあるし天台宗もある、真言宗もある、あるいは禅宗もある、いくつもの宗旨があります。これは一見相当違うように見えますけれども、終着点はどの宗旨も同じで、それはお釈迦様が「覚りを開くことが仏教の目的である。」とお

っしやったわけで、要はそこへたどり着くための方法が違う、方法論の違いだけなんです。

例えば私たちがどこかへ行こうとする、例えば神戸から東京まで行く、その場合に新幹線に乗っていく方法もあれば、飛行機で行く方法もある。あるいは歩いていく方法もあるし、自転車で行く方法もある。自家用飛行機をお持ちの方はそれにお乗りになるでしょうし、通っていく道や利用するものが違うだけであって、到達点は同じ東京である。

どうしていろんな方法があるかといえますと、何もお釈迦様が多くの店を広げようとされてそうなさったんじゃないくて、その教えを聞いていく、修行していこうとする私たちの、言ってみれば性分が違うんですね、好みが違う。自分にぴったり合う方法がどれかということ、一番自分の気に入った方法を選べばいい。厳しい修行に耐えていこうとする人、修行以外の方法に依よろうとする人、色々あるわけです。

時々、「宗旨がいっぱいあるけど、なんとか一つにならないんですか。」なんておっしゃる方があります。私は「いっぱいある方が有り難いんです。」と申し上げてるんです。その人に一番合った方法で、歩くのが好きな人は歩けばいいし、車を運転して行きたい人は車を運転すればいい。お釈迦様が一人ひとりにその人に合う教えを説いておられるうちに、教えの数が増えてしまったんです。数が増えたのはお釈迦様のせいではなくて、教えを受けていく私たちが、増やさせてしまったのです。「八万四千しの法門」といって、教えが一杯あるのが仏教の特色です。八万四千というのは、正確に八万四千あるっていうんじゃないなくて、教えが一杯あるという意味です。

そういうたくさんの方法の中から、どれを選ぶか。それはもう結局は「どれが好きか、どれが嫌いか」だけです。

そこで、この方法論の部分をお話するのが本当は一番大事なことなんです。ありますが、私がしゃべり出すと浄土真宗のコマーシャルになってしまいそう

です。今日は会則でも禁じられていますし（笑）、やはりここには色々な宗教・宗旨の方がおいでなので、特定の宗旨のお話をするわけにはまいりません。それは別の機会に譲って、次にお話を移したいと思います。

成 果

最後の第三点は成果ということです。

信心なり覚りなり、一つの境地に到達するとどういふ成果が現れるか。

「ライオンと虎」という話が時々出ます。どう違うか。着てる皮の模様が違うだけではないのか（笑）。ライオンはお腹なかが膨れたら食べるのをやめて、別の獲物を追っかけようとはしない。ところが虎の場合はお腹が膨れてもまだ食べようとする、獲物を捕ろうとする。これがライオンが百獣の王だといわれるゆえんだそうです。信仰を身に付けることによって必要なむさぼりがなくなる。私がそうだといっているんじゃないやありません。「いや、虎は

あんたのことや。」と言われるかも知れませんが……(笑)。お互いにそういうふうには、ご一緒にそういうふうになりたいですね、という願望を申し上げているんです(笑)。

「のに」と言う助詞がありますね、「何々してやったのに……」。その「のに」という言葉が出なくなる。これは愚痴ぐちがなくなるということ、これも大きな成果です。

何かというと私たちはすぐ腹を立てます。腹を立てたくなった相手に、「ああ、気の毒な人やなあ。」あるい



は、「私自身が抜かっていたなあ。」という気持ちになれる。こういうことも成果であると思います。

「きよらか」という言葉。仏教以外でも出ることばですが、仏教の場合でもきよらか、あるいは「清浄しよじよ」ということを行います。「きよらか」とはどのようなことなのか、あちらこちらに書いてありそうで、わりと書いてありません。それで色々考えたんですが、どうやら「人のために惜しまずに苦労して、しかもしてやっ、た」という意識が残らない」ということが、きよらか・清浄ということの中身です。

「布施」というと、「お寺さんにお金を上げることや。」と、普通思われております。「布施」というのは「人に物を与えて、与えたことに拘らない」、人にお金でも物でも上げて、上げたことを忘れるんではないんだけど、それに拘らない物の上げ方、これを布施といいます。これもやはりきよらかな行いです。

また、自分がプラスを受けたときにプラスに反応するのは当たり前であつて——どこかのコマースシャルかなんかにそんなのありましたね（笑）——マイナスがプラスになる、マイナスを受けても受け方の段階でそれがプラスに変わつていて、次の行動がプラスになる。ちよつとややこしい言い方になつてしまいましたが、不幸に遭つても決して不幸に陥らずに、そのことを自分の得手に取つて、前向きに、無理をしなくてもすつと前向きの考え方、行いができるいくようになる。これが成果のもうひとつだと思います。

ほかにもいっぱいこういう成果と言えるものがあります。皆様方もおそらくそうしてらっしゃるんじゃないかと思いますが、大きな損をした時です。お仕事の上で損をなされた場合に、「損をした、損をした。」といつまでも思つても仕方がないで、「これはもう世の中にお金を投資したんや。」というふうに見えるようになれば……（笑）。私もこれ他人事ひとごとのように言っておりますが、自分はなかなかそんなふうにはなれません。でも、こういう思いに

なれるという成果が出てくるはずです。

このように、マイナスを受けても決してマイナスのまま突っ込んで行かずにプラスに転じるような行動に変わっていく、ということも大きな成果であろうと思います。

皆様方は、信仰というものをお持ちであろうとは存じますが、一層お深めいただきたい。また、「これから」という方は、何か一つご自身の宗教を選ばれて、それを深めていただきたい。そのことが必ず皆様方の元気に繋がっていく。元気の源をそこから得ることができると確信いたします。

私たちは——わりと気がつかないことなんです——すべて自分の心の作用で二十四時間を過ごしています。ですから結局は自分の心の赴くままに、その方向へ動いています。その心の一番深いところで支えられているという実感、満足感といいますか安心感ですね、充実感と言ってもいいかもしれま

せん。そういうものが宗教によって得られる、それが私は元氣の源であると思えます。

勿論、真の元氣、高度な元氣、良質の元氣でないは何もなりません。真の元氣、高度な元氣、良質の元氣は良質の宗教によって得られることはいうまでもありません。

お付き合いありがとうございました。(拍手)



感想
意見

富山県高岡市 匿名希望

いつもやさしい言葉でわかりやすく、ありがたく尊いおみのりを説いて下さりありがとうございます。 「みめぐみの」を拝読させていただいているとむずかしい信心安心論から解放されホッとひと息ついて知らずしらずのうちに信心を増長させていただけられるようです。 来迎の様子を意識がすばらしく末期にこのようなお出迎えに出会えたら本人も周囲の人々もとびあがってよろこぶことでしょうね。 本文もいつもすばらしいのですが、みめぐみの刊行委員会のあとがきの文章にも

いつも感嘆しています。表紙の絵もきれいで他に比類のない小冊子だと思います。

日常の

よろず事こそ

諸行かな

合掌

神奈川県座間市 川原 千代さん

あとがき

みめぐみの刊行委員会

大谷光道台下は寺院や門徒宅という枠にとどまらず、他の団体へも講演にお出かけという機会が増えてきております。

この『第9部』では、そうした中から昨年11月24日に行われた中小企業家同友会西神戸支部「ビッグ例会」のご講演に加筆していただき掲載いたしました。

今回はめったに口にされなかったご自身の専攻についてまで述べておられます。

宗教学、真宗学などの発想を超え、さらに科学や哲学、文学といった思考をもカバーした人間親鸞聖人からの本願の源流を、読むままに汲み取って頂ければと思います。

愛読者の広がりへのご尽力に深謝し、ご感想等お寄せいただきたくお待ちしております。

◎「中小企業家同友会」は全国44都道府県に支部を持ち、会員41000社の組織で、中小企業経営者の会社経営の研究活動を中心とした団体です。

みめぐみの 第9部

2000年3月5日 印刷

2000年3月10日 発行

定価 200円

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社

